



## 語学力上達のコツ

---

1998年10月26日

語学力上達のコツ

長光一寛

（信越化学の特許部に在籍していた頃、社報編集部が「語学力上達のコツ」という連載を企画した折、依頼されて載せた一編）

「長光さん、このスピーチは英文のほうを読まれるそうですが、何分くらいかかりましたか？」同時通訳嬢が英文と和文の原稿を受け取りながらぼくに質問した。

「15分です、きっかりと」ぼくはこの答えの正確さに自信があった。練習で計測したわけではないが確かに15分で終わるのだ。

「あすはこの原稿のとおり読まれるのですね。」

「そうです」読むというのは正確ではなかったが、スピーチは原稿のとおりだ。

昨年の秋、岡山でぼくはある特許関連の日米定例会議において日本側の代表の一人として最終日の3日目にスピーチをする予定だった。この数年来米国側より、日本側の英語スピーチは判りにくく、通訳の英語をイヤフォーンで聞いたほうが理解しやすいので日本語で発表してもらいたい、という要望が出されていたためか、岡山での日本側発表者はみな自国語で発表していた。米側のスピーチには巧みにユーモアが盛り込まれ迫力の点でも日本側を圧倒していた。一日目にある米側代表者が、米国では特許クレームを攻撃武器として書くが日本人は防衛武器として書いているようだと言った。ぼくらは憤った。ぼくの用意していたスピーチは、統計によると日本企業もこれからは特許権を積極的に攻略兵器として行使することになるだろうという布告であった。このスピーチを米側に女性通訳者の軽快な英語ではなく、ぼくのなまりを込めた英語で聞かせねばならない、また英語で話すにしてもただ下を向いて原稿を読むだけだったら迫力に欠けよう、彼らの視線を見返す状態で発せねばならないと思った。ぼくはトリックを使うことにした。

三日目の午前、三人目のスピーカーとしてイヤフォーンを左耳に押し込みながらぼくは原稿なしで演壇に上がった。米人たちはぼくが英語で話すというので耳からイヤフォーンを外した。最初少しあがってしまって声がうわずったがすぐに持ち直したぼくはサーチライトのように会場の聴衆に満遍なく視線を回遊させながら演説した。原稿を見ないで正確な英語でスピーチするぼくに聴衆は好奇の眼差しを注ぐ。ぼくは中盤では一口水を飲む余裕さえできた。スピーチはしっかり15分で終わった。拍手。そして昼食会では同胞のみならず米側からも何人かがスピーチをほめてくれぼくの手を握った。

「語学力上達のコツ」を披露するほどぼくは上達していない。だから上のトリックのタネの披露でご容赦願います。

学生時代よりぼくがなじんでいる英会話練習法はshadowing といって、あまり速くないnative speakerの英語をテープ等で聞きながらそれを影が追いかけるように瞬時にまねて自分でもしゃべるものだ。さて、岡山での一日目の夜ぼくは持参していた録音機能付ウォークマンで自分の発表する英文スピーチの原稿を丁寧に読んで録音した。真ん中あたりで水を飲むための空白も設けた。意外に長くかかり30分テープの片面にかろうじて納まった。ぼくは本番までこのテープで何度もshadowing をしてそれに慣れた。そして三日目、演壇に上がる直前に同時通訳サービス用のイヤフォーンのプラグを携帯レシーバーから抜き、代わりにポケットの中のぼくのウォークマンにつないでその再生ボタンを押し、聴衆の前ではあたかも同時通訳のペースをモニターしながら話すのだというようにイヤフォーンを左耳に刺した。その後は壇上で左耳から流れてくる自分の

声のリードにしたがってお手のもののshadowing をするばかりであった。



聴衆は好奇の眼差しを注ぐ

for English version: <http://p.booklog.jp/book/111774/read>

[宮崎に寄せて 語学]: <http://p.booklog.jp/book/103939/read>

[amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro](http://amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro)